関西大学心理臨床センター紀要，8，27～35，2017

研究論文

子育てにおける親の内的資源
── 外的資源が限られた地域における親の内的資源の探索 ──

関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程　長屋　裕介
関西大学臨床心理専門職大学院　中田　行重

要約

相談資源の限られている地域における親の支援のあり方を模索する研究の一つとして、本稿では、子育てにおける親の内的資源に着目し、いくつかの概念に基づいた先行研究から親個人の機能や能力について整理していくことを目的とする。親のレジリエンスとエンパワメントに関する先行研究から考えられた親の内的資源は、①子どもに関する親の内的資源、②社会とのやりとりに関する親の内的資源、③親自身に関する親の内的資源に整理された。中でも、子どもに関する見通し、社会とのつながりといった親の内的資源が、外的資源の少ない環境において親を支援する際に特に注目する必要があることが考えられた。

キーワード：親、内的資源、親支援、子育て

Ⅰ　はじめに

現在、学校現場においては発達障害、いじめ、不登校、非行など多種多様な問題に対応することが求められている。子どもを支える家庭においても、核家族化による子育ての孤立、ドメスティック・バイオレンス、虐待、貧困といった問題が混在している。そうした中、教育センター、児童相談所、医療機関、大学の相談機関といった地域の相談資源による子どもやその世帯を支えている機能は大きい。一方で、僻地においては、地域の相談資源が限られているという問題があり、更に、国際化の時代の中、転勤による海外での生活においては、適応の問題や以上の日本国内のような支援を受けられない状況がある。地域によって違いはみられるものの、海外のように活用できる相談資源が限られている状況下においては、子どもや親の受け皿となる学校の機能や、親自身の子育ての機能を維持することや高めていくことが求められているといえる。海外の教育相談活動において支援を組み立てる上で、子育ての困難な状況とその環境要因の把握に加え、親に元々備わっている能力も併せて見極めていく必要があることが示唆されている（長屋、2015）。

そうした中で、子育てにおける困難な状況を検討する際に、資源という視点で捉えると、学校や地域コミュニティ、更に日本では、上記に挙げられるような専門機関は外的資源として、そして、親に備わっている能力については内的資源として位置づけることができるだろう。外的資源については、ソーシャルサポートとして概念が定着されている一方で、内的資源に関しては、多様な概念から捉えることができる。そこで、本稿では、相談資源が限られている地域における親の支援のあり方を模索する研究の一つとして、子育てにおける親の内的資源に着目し、いくつかの概念に基づいた先行研究から親

個人の機能や能力について整理していくことを目的とし、更に、外的資源の少ない地域において注目すべき親の内的資源についても触れていきたい。

Ⅱ　親の機能や能力に関する研究

1. レジリエンス

個人の力の概念の一つとして、レジリエンスがある。平野（2012）は、レジリエンスを、“逆境にさらされたり、ストレスフルな出来事によって精神的な傷つきを受けても、そこから立ち直り、適応していくことができる個人の特性”と述べている。また、齊藤・岡安（2009）は、レジリエンスを“心理的ホメオスタシスとして、ストレッサーに曝露されても心理的な健康状態を維持する力、あるいは一時的に不適応状態に陥ったとしても、それを乗り越え健康な状態へ回復していく力”と述べている。小花和（2004）は、子どものレジリエンス要因を環境要因に含まれる“子どもの周囲から提供される要因（I HAVE Factor）”、個人内要因に含まれる“子どもの個人要因（I AM Factor）”、“子どもによって獲得される要因（I CAN Factor）”に分類している。母親のレジリエンス研究の文献レビューを大関（2015）が行っており、母親のレジリエンスの構成要因として、“受け止める力／内面の強さ”、“支援”、“問題解決力／対処する力”の３要因があり、また、レジリエンスの高い母親の特徴として、年齢の高さ、有職者、夫や家族の援助、育児経験を挙げている。ここでは、改めて親のレジリエンスに関する先行研究を概観し、より詳細に親の内的資源について模索することとしたい。

小川・本郷（2014）は、自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）の子どもを持つ母親の育児に伴う苦悩とそれを乗り越えていく体験に関する先行研究から、その苦悩を乗り越えて行く力（レジリエンス）を補強するための看護師の役割を検討した。収集した64文献は５つのカテゴリーに大別され、それらの１つである【母親の乗り越えていった経験とレジリエンス】のカテゴリーに含まれる項目を以下に記述する。〈診断告知態度の要因〉では、医療者の理解、親への配慮などの経験が医療者への信頼を高め、告知後に前向きに育児に取り組むエネルギーになった。〈子どもとの関係性形成〉では、子どもへの接し方を理解し、それにより子どもの反応が増え、子どもとの関係性形成により、母親の気持ちが前向きに変化している。〈親の内的要因〉は、告知前に障害の知識を持っていた親は、より早く養育に積極的になる傾向がみられた。〈社会的要因〉においては、サポート源に対する満足度の高い人は、障害に対する前向きな取り組みも高いことが示された。社会とのつながりを持つ頻度が高いことは、相談や気持ちを共有する仲間によって精神的な落ち込みや孤立の軽減となり、困難な状況に前向きに取り組むことができると考えられた。

日高・伊藤（2014）は、ASDの子どもの母親の日常生活におけるレジリエンスのプロセスについて、母親の日常の作業から明らかにすることを目的とし、４～14歳のASDの子どもの母親14名を２つのグループに分け、各２回ずつフォーカスグループインタビューを行った。分析の結果、レジリエンスに関係すると思われる内容から、〈育児と家事によるストレス〉、〈ありのままの子どもを受け入れる〉、〈家事と育児を遂行する手段の拡大〉、〈生活のバランスを整える〉、〈子どもの将来への準備〉の５つのカテゴリーが得られた。母親の育児・家事に対する認識や行動の変化が日常の作業と関係しており、背景として、家族の協力、学校、地域の支援などの環境の関わりが影響していた。また、母親の生活は、子どもの成長に合わせて変化し、生活のバランスの維持は困難であることも語られた。

鈴木ら（2015）は、ASDの子どもを持つ母親において、養育困難があるにも関わらず、良

好に適応する思考過程を養育レジリエンスと考え、その構成要素を明らかにすることを目的とし、ASD の 16 歳以上の子どもの母親 23 名に半構造化面接を実施し、年齢による区分ごとに子どもや支援者との関わりについて聴き取り調査を行った。分析の結果、5 つのカテゴリーから成る養育レジリエンスのモデルが想定された。各カテゴリーの概念として、①親意識は、〈親としての自覚〉、〈子どものがんばりの認知〉、〈子どもとの連帯感〉、②自己効力感は、〈自己効力感〉、③特徴理解は、〈障害の認識〉、〈子どもの特徴理解〉、〈発達障害に関する知識〉、④社会的支援は、〈無理解者の認容〉、〈聴き手の認知〉、〈支援者の認知〉、⑤見通しは、〈子どもについての予測〉、〈環境の予測〉となっている。①や②は、子どもを取り巻く問題を解決するための動機づけとなり、問題が生じた際には、③、④、⑤を活用して、適切な対処を選択する過程が示された。

仁尾（2011）は、ダウン症の子どもの母親の背景要因と自立に関する認識によるレジリエンスの差異を明らかにすることを目的とし、12 ～ 22 歳のダウン症児の母親 297 名を対象に調査を実施した。尺度は、自立に対する認識の尺度と S-H 式レジリエンス検査用紙を用いており、後者は、佐藤・祐宗（2009）によって信頼性・妥当性が検証され、〈ソーシャルサポート〉、〈自己効力感〉、〈社会性〉の 3 因子から構成されている。結果は、背景要因では有職者がレジリエンス合計得点、〈自己効力感〉因子の得点が高かった。自立に関する認識では、【自立に対する望み】高得点群で、レジリエンスの合計得点、〈ソーシャルサポート〉、〈自己効力感〉の得点が有意に高く、〈ソーシャルサポート〉において差が顕著であった。また、【自立に向けたかかわり】高得点群で、レジリエンス合計得点と 3 因子すべての得点が有意に高い結果となった。

橋本ら（2011）は、障害を持つ子どもの母親のレジリエンスがどのような要素から成り立っているかを明らかにすることを目的とし、16 ～ 17 歳の子どもの母親 3 名を対象に子育て経験を振り返る 7 項目について半構造化面接を実施した。分析の結果、レジリエンスの要素として、〈I have〉、〈I can〉が抽出され、〈I have〉は、【同じ立場の仲間の支え】、【家族の支え】、【友人の支え】、【専門家の支え】、〈I can〉は、【対人間問題解決スキル】、【個人間問題解決スキル】のカテゴリーからなる。ここでは、〈I can〉のカテゴリーについてみていく。【対人間問題解決スキル】は、“人にしゃべる”、“言いたいことはその場で言う”、“自分から積極的に周囲に働きかける”、“自分から専門家にアドバイスを求める”、“人に話し、相手の反応をみることで自分を知る”、といった 5 個のサブカテゴリーからなる。【個人間問題解決スキル】は、“やりがいを感じられる活動に取り組む”、“気持ちを貯めこまずに発散する”、“今後の見通しを持ちながら子育てをする”、“環境を変えて気分転換をする”、“自ら何事も吸収しようとする”、“日々の生活を楽しむ”、“いつまでも引きずらず早いうちに解決する”、“今を一生懸命やるしかない”、“この子のことで今後いろいろあっても何とかなると思える”、“嫌なことは忘れる”、“何事にもどんと構えていられる”、“自分自身でこの子を選んだと思える”、といった 12 個のサブカテゴリーからなる。

宮野ら（2014）は、親の育児サポートの活用のための育児関連レジリエンス尺度の開発を目的とし、3 歳児健診に訪れた母親 97 名を分析対象に作成した尺度の有効性を検証した。因子分析の結果、「周囲からの支援（I have 因子）」、「問題解決力（I can 因子）」、「受け止め力（I am 因子）」の 3 因子となった。ここでは、「問題解決力」と「受け止め力」について記述する。「問題解決力」は、“いろいろな角度からものごとをみることができる”、“経験を活かして物事に対処することができる”、“問題解決に向けて努力することができる”、“すぐにあきらめてしまわず、可能な方法を見出そうとする”、“自分が感じていることをうまく人に伝えることがで

きる”などの11項目からなる。「受け止め力」は、“いつも日常の中に喜びを見出すことができる”、“物事を肯定的に受け止めることが多い”、“自分で気分転換をはかることができる”などの6項目からなる。調査結果からは、尺度の実用可能性が示唆されている。

尾野・茂木（2012）は、子育てレジリエンス尺度（尾野ら、2011）を用いて、15歳までの障害を持つ子どもの母親135名を対象として、子育てレジリエンスに影響を与える要因を検討した。尺度は、3因子で構成される。「ペアレンタル・スキル（I can）」は、子どもに対して適宜に対応する能力、家庭生活を支える上で必要な家事をこなす力に関する項目、「ソーシャルサポート（I have）」は、周囲の人からの子どもの評価や理解を得るなど周りからのサポートに関する項目、「母性感情（I am）」母親として自分自身を肯定的に受け入れて、子どもや家族との関わりを楽しんでいる項目からなる。この尺度と育児負担感指標、特性自己効力感、精神的健康度の日本版GHQ-12項目短縮版を併せて実施した。結果、レジリエンス高低群の比較からレジリエンスを備えた母親は、育児負担感が低く、自己効力感や精神的健康度が高いことが示された。障害種別では、ダウン症、自閉症、知的障害の順に子育てレジリエンス得点が減少し、知的障害の子どもの母親は、「ペアレンタル・スキル」において有意に得点が低い結果となった。

五百蔵・山口（2015）は、レジリエンスとソーシャルサポートといった要因が、発達障害を持つ子どもの母親の育児困難感と抑うつ感を軽減しているのかを検討した。0歳から18歳の発達に遅れを持つ子どもの母親108名を分析対象に育児困難感尺度、ソーシャルサポート尺度、精神的回復力尺度、CES-D Scaleを実施した。精神的回復力尺度は、小塩ら（2002）によって作成され、肯定的な未来志向性、感情の調整、興味・関心の多様性、忍耐性の4要因をレジリエンスの状態にあるものに特徴的な心理特性とし、「新奇性追求」、「感情調整」、「肯定的な未来志向」の3因子、21項目からなる。レジリエンスの結果については、直接的ならびに間接的に感情調整が、直接的に肯定的な未来志向が、間接的に新奇性追求が抑うつ傾向を低減させることが示唆された。感情調整に関しては、集団適応への遅れへの困難感を直接的に低減させることが示唆された。

以上のように親のレジリエンス研究からみることができる親の内的資源としては、重複しているものもあるが、①子どもに関する親の内的資源、②社会とのやりとりに関する親の内的資源、③親自身に関する親の内的資源、と3つに分けることができるだろう。①は、子どもへの接し方、子どもを受け入れる姿勢、子どものがんばりの認知や特徴理解、障害の知識や認識、将来への準備や見通し、②は、社会とのつながりや認知、社会性、対人間問題解決スキル、③は、親としての自覚、物事への問題解決力、生活のバランスの調整、自己効力感、個人間問題解決スキル、感情調整、肯定的な受け止めが挙げられる。

2. エンパワメント

森田（1998）は、エンパワメントについて、“わたしたち一人ひとりが誰でも潜在的にもっているパワーや個性をふたたび生き生きと息吹かせること”、“すべての人が持つそれぞれの内的な資源にアクセスすること”としている。以下では、このエンパワメントの概念を通して、親の持っている内的資源を検討するべく、親のエンパワメントの先行研究の中でも実践のねらいが明記されているプログラムに関する研究を取り上げ、概観していく。

石丸・奇（2012）は、第1研究で、育児不安尺度と自己信頼感尺度を用いて、母親の育児に取り組む気持ちと母親自身の信頼感の関係を明らかにし、取り組む気持ちによって自己信頼感の捉え方に違いがあるのかについて検討するこ

とを目的とし、幼稚園児の母親161名を分析対象とした。第2研究では、幼稚園児の母親22名に主動型リラクセイション療法（以下、サート）を実施し、母親の中に潜在していると思われる自己信頼感の向上を目指し、子育て支援の新たな可能性を検討した。調査内容として、自己信頼感質問紙と日本語版POMS短縮版に加え、サート実施経過後のインタビュー調査とトレーナの面接記録も含まれる。以上の研究を通して、育児に対して肯定的に取り組むには、母親の自己への信頼、自信が大きく影響し、育児を行う母親の気持ちを支えるもののひとつであることが分かった。サートの導入によって、身体を通して自分をみつめる体験が、母親の中にある主体性を引き出させ、その積極的な態度が将来への肯定的な見通しやありのままの自分でいることの大切さ、忙しさの中でも自分を労わり、尊重することの大切さを気づかせていった。また、それらが子育てに反映されて取り組み方に変化をもたらしたと考察された。

森田（2004）は、グループのエンパワメントの力動を活用した虐待をする親の回復支援MY TREEペアレンツ・プログラムを紹介している。プログラムの目的は、セルフケアと問題解決であり、エンパワメントの過程は、以下に示す。①仲間と出会い、人とつながることのニーズを再復活させる。②自分の体験と他者の語るストーリーの共通点や違いを見出し、他人の痛みに共感し、自分の痛みに涙してくれる人と出会うことで、孤独感は連帯感に、所属感にとってかわられる。③安心な場でありのままの自分を語ることが可能になり、様々な感情を言葉にし、共感を得ることで、自分で問題解決が可能であることへの自信を取り戻し、問題解決の選択肢を考えることができる。プログラムの構成は13～15回のセッションを地域の子育て支援・虐待防止ネットワークの協力体制を活用して実施するように構成される。プログラムの本体はまなびのワーク、じぶんをトーク、フォローアップ緊急電話相談先、保育が挙げられている。

寺嶋（2014）は、カナダ保健省（当時の保健福祉省）と太平洋4州の保健部局で開発された親教育プログラムであるNobody's Perfectプログラムの実践を紹介している。目的は親が自分の長所に気づき、健康で幸福な子どもを育てるための前向きな方法を見出せるように手助けすることで、ねらいとして、①子どもの健康・安全・行動についての親の知識と理解を増やす、②子どもの健康・安全・行動に関する親の行動の前向きな変化をもたらす、③親としての自信とセルフイメージを高める、④親としての対処能力を高める、⑤親同士のセルフヘルプとサポートを高める、が挙げられる。プログラムの基本の考え方には、①参加者中心、②価値観の尊重、③体験を通して学ぶ（体験学習サイクル）が挙げられ、セッションは、オープニング・主部・結びの3つの部分から構成されており、プログラム全体を通しても、この3つの部分から構成されている。日本における導入として、1～3歳の子どもを持つ初めての子育てをしている母親を対象に、週1回午前中2時間、8週連続で実施している。実施結果では、最終回のアンケートを挙げており、「悩んでいいのだ」「自分以外にも同じ悩みを持っている人がいるのだ」という発見からは、同じ悩みを持つ他の参加者を思い出して自分を落ち着かせたり、他の参加者の方法を試したりといった行動へ結びつき、「口に出して話すこと、他の参加者に聞いてもらうことで自分の考えや思いを再確認できた」という評価からは、他者の価値観を知り自分の価値観について再確認し、自分らしい子育てをみつけることへ繋がっており、「イライラすることが減った」といった評価からは、気持ちにゆとりができ、他の参加者からの様々な視点や取り組みを聞くことで、子育てのスキルの選択肢も増えていき、自己効力感が向上している様子が述べられている。

永井ら（2005）は、心理教育的介入の効果を検証するため、介入の前後で質問紙を実施し、43名の小・中学生の親を分析対象とした。講座

は、半日1回として4回ずつ実施し、内容は、カウンセリングの基礎知識に関する講義、構成的グループ・エンカウンター、ニュー・カウンセリング、アサーション及び傾聴トレーニングなどのエクササイズを、小・中学生の親に合わせて構成した。目標は、①カウンセリングの基礎知識が理解でき、興味が持てる、②親同士が、経験や感情を言葉にして表現することができる、③肯定的自己概念の認識が促進され、自尊感情が高まる、④子どもの感情を理解し、対応の取り方をイメージできる、となっている。質問紙は、精神保健調査票、自尊感情尺度に加え、子どもに対する満足度、子どもの気持ちの理解度などを評価するための質問を実施した。結果、精神健康度、身体的症状及びうつ傾向の改善、自尊感情の上昇、子どもの成長に関する満足度及び理解度の向上が有意にみられた。また、子どもの気持ちを今以上に理解したいとより強く思うようになる傾向もみられた。

石崎・朴木（2014）は、母子生活支援施設の母親を対象としたエンパワメントプログラムを作成し、受講した17名の母親にプログラム受講前後にアンケートを実施し、受講1ヵ月から1ヵ月半後に16名の母親にインタビューを実施した。プログラムは、グループで全5回実施し、1回目は安心のワーク、2回目は傾聴をテーマに聴く練習、3回目はジェンダーについての話し合い、4回目はアサーティブ、5回目は自分の短所を長所に書き換える内容となっている。インタビューからは、子どもへの接し方、ジェンダーの気づき、コミュニケーションのとり方の変化、自己肯定感などを中心に意識や行動に変化がみられた。

以上のように親のエンパワメントのプログラムにおいて焦点付けられているねらいやその効果からみることができる親の内的資源としては、重複しているものもあるが、レジリエンスと同様に、①子どもに関する親の内的資源、②社会とのやりとりに関する親の内的資源、③親自身に関する親の内的資源、と3つに分けることができるだろう。①は、子どもへの接し方、健康・安全・行動についての知識、感情の理解、対処能力、問題解決の選択肢、②は、社会とのコミュニケーション、連帯感、所属感、③は、親自身のセルフイメージ、ジェンダー、自己への信頼、自己肯定感、自己効力感、自尊感情、前向きな行動が挙げられる。

Ⅲ　親の内的資源

以上の親のレジリエンスとエンパワメントに関する先行研究を踏まえて、1. 考えられる親の内的資源を整理し、2. 外的資源の少ない環境における親の内的資源を検討した上で、3. 今後の課題について述べていく。

1. 考えられる親の内的資源

親のレジリエンスおよびエンパワメントに関する先行研究のいずれも親の内的資源を、①子どもに関する親の内的資源、②社会とのやりとりに関する親の内的資源、③親自身に関する親の内的資源、の3つに分けることができた。それぞれの先行研究から得られた3種の内的資源を整理し、以下に記述する。

①子どもに関する親の内的資源は、**a. 子どもへの対処能力**（子どもへの接し方、対処能力、問題解決の選択肢）、**b. 子どもの理解**（子どもを受け入れる姿勢、子どものがんばりの認知や特徴理解、感情の理解）、**c. 子どもの知識**（障害の知識や認識、健康・安全・行動についての知識）、**d. 子どもに関する見通し**（将来への準備や見通し）が挙げられる。

②社会とのやりとりに関する親の内的資源は、**e. 社会への対処能力**（社会性、対人間問題解決スキル、社会とのコミュニケーション）、**f. 社会の認知**（社会の認知）、**g. 社会とのつながり**（社会とのつながり、連帯感、所属感）が挙げられる。

最後に、③親自身に関する親の内的資源は、

h. 物事への対処能力（物事への問題解決力、生活のバランスの調整）、**i. 親としての自覚**（親としての自覚）、**j. 自己対処能力**（個人間問題解決スキル、感情調整、肯定的な受け止め、前向きな行動）、**k. 自己認識**（親自身のセルフイメージ、ジェンダー、自己への信頼、自己肯定感、自己効力感、自尊感情）が挙げられる。

2. 外的資源の少ない環境における親の内的資源

ここでは、外的資源の少ない環境において親を支援する際に特に注目する必要があると考えられる親の内的資源について述べていく。長屋（2015）は、海外の教育機関の一つである日本人学校に在籍する子どもの親の子育てに関する困難な状況の一つとして、現地校での進路の選択肢、日本の高校受験、帰国枠の活用状況の情報の入手し難さを挙げている。漆澤ら（2011）は、日本人学校に在籍する子どもの親の帰国転入にあたっての不安として、子どもの適応や周囲のサポートなどに関する回答を挙げている。父親の転勤時期が定まり難いといった家庭状況もみられる中で、**d. 子どもに関する見通し**といった親の内的資源を重視することは、外的資源の少ない環境において重要であると考える。また、長屋ら（2013）は、海外で子育てする母親の現状の一つとして、専門的な知識を持つ第3者的な相談資源すなわち外的資源が不足しており、親対教員、親対他の親といった二者関係における行き詰まりが生じていることについて挙げている。鈴木ら（2009）、鈴木ら（2011）は、海外における邦人メンタルヘルス専門家に関する課題について、海外では人材の出入りが激しいためネットワークが出来ても切れやすいことを述べている。日本人学校でも同様に、教員の派遣期間は文部科学省によると、原則として2年間となっている。そうした中で、親が、現地にある**g. 社会とのつながり**を内的資源として持っているかについては支援者側が特に注意を向ける必要があるといえるだろう。

3. 今後の課題

本稿では、親のレジリエンスとエンパワメントの概念を用いた先行研究から考えられる親の内的資源について整理した。最後に、親の内的資源に関する研究の今後の課題について以下に述べていく。

先行研究は主として母親を対象としているもので父親に関するものは限られている。海外においては、父親のサポートがないといった家庭や母親の相談相手として父親を挙げるものは少ないといった状況もある（長屋ら、2013）。そうした中で、母親と同様に子育ての役割を担う必要がある父親の内的資源についても整理していく必要があるだろう。また、本稿では、親の内的資源についてそれぞれの子育ての状況を分けずにまとめて整理している。今後、子どもの年齢、障害の有無、住んでいる地域の特性とより詳細に親の子育ての状況を踏まえて、親の内的資源について捉えていくことも課題として挙げられる。併せて親のパーソナリティ特性、知的能力など他の観点や概念からも親の内的資源について理解を深めていく必要があると考える。そして、特に、外的資源の少ない地域を対象に、親の内的資源を踏まえて子育ての困難な状況を乗り越える個々の過程に着目した研究や、外部の専門家によって親の内的資源を底上げする実践研究も、今後、積み重ねていく必要があるだろう。

文献

橋本真規・橋本陽介・熊井正之（2011）障害児を育てる母親のレジリエンスの実態──半構造化面接調査による質的研究──，教育情報学研究，10，1-13.

日高幹代・伊藤祐子（2014）自閉症スペクトラム障害（ASD）児の母親の日常生活におけるレジリエンス，日本保健科学学会誌，17（Suppl），18.

平野真理（2012）生得性・後天性の観点からみたレジリエンスの展望，東京大学大学院教育学研究

科紀要，52，411-417.

五百蔵恵・山口一（2015）発達障害を持つ子どもを育てる母親のレジリエンスおよびソーシャルサポートが育児困難感および抑うつに及ぼす影響について，心理学研究：健康心理学専攻・臨床心理学専攻，5，29-45.

石丸寛子・奇恵英（2012）母親をエンパワーメントする子育て支援についての臨床心理学的研究──サートを用いた自己信頼感向上の試み──，臨床心理学：福岡女学院大学大学院紀要，9，1-9.

石崎和美・朴木佳緒留（2014）母子生活支援施設における母親のエンパワメントプログラムの開発，神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，7(2)，191-201.

宮野遊子・藤本美穂・山田純子・藤原千恵子（2014）育児関連レジリエンス尺度の開発，日本小児看護学会誌，23(1)，1-7.

森田ゆり（1998）エンパワメントと人権　こころの力のみなもとへ，解放出版社.

森田ゆり（2004）MY TREE ペアレンツ・プログラム──子どもの虐待・DV 問題を抱える親の回復支援──，子どもの虐待とネグレクト，6(1)，83-89.

永井道子・荒木田美香子・安梅勅江（2005）小・中学生の親を対象にした心理教育的介入の効果，日本保健福祉学会誌，11(1･2)，79-87.

長屋裕介・後藤龍太・大嶋杏奈・庄司春花・平野直己（2013）日本人学校へのメンタルヘルス支援の可能性の検討（Ⅱ）──第 2 回実践調査からみえてきた保護者の期待と支援の方法──，学校臨床心理学研究：北海道教育大学大学院研究紀要，11，69-78.

長屋裕介（2015）海外における子育ての現状と課題──日本人学校に通う児童生徒の保護者へのインタビュー調査から──，日本コミュニティ心理学会第 18 回大会発表論文集，90-91.

仁尾かおり（2011）思春期・青年期にあるダウン症の子どもをもつ母親のレジリエンス──背景要因と自立に対する認識によるレジリエンスの差異──，日本小児看護学会誌，20(3)，43-50.

小花和 Wright 尚子（2004）幼児期のレジリエンス，ナカニシヤ出版.

小川真奈美・本郷久美子（2014）自閉症スペクトラム障害の児を持つ母親の苦悩とそれを乗り越えていく力（レジリエンス）についての文献的研究，三育学院大学紀要，6(1)，81-90.

尾野明未・奥田訓子・茂木俊彦（2011）子育てレジリエンス尺度の開発の試み，日本ヒューマン・ケア心理学会第 13 回大会発表論文集，65.

尾野明未・茂木俊彦（2012）障害児を持つ母親の子育てレジリエンスに関する研究，心理学研究：健康心理学専攻・臨床心理学専攻，2，67-77.

大関信子（2015）母親のレジリエンスの研究の動向と最新の知見，女性心身医学，20(1)，73

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治（2002）ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性──精神的回復力尺度の作成──，カウンセリング研究，35(1)，57-65.

齊藤和貴・岡安孝弘（2009）最近のレジリエンス研究の動向と課題，明治大学心理社会学研究，4，72-84.

佐藤琢志・祐宗省三（2009）レジリエンス尺度の標準化の試み──「S-H 式レジリエンス検査（パート 1)」の作成および信頼性・妥当性の検討──，看護研究，42(1)，45-52.

鈴木浩太・小林朋佳・森山花鈴・加我牧子・平谷美智夫・渡部京太・山下裕史朗・林隆・稲垣真澄（2015）自閉症スペクトラム児（者）をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究，脳と発達，47(4)，283-288.

鈴木満・仲本光一・吾妻壮・森真佐子・バーンズ静子・坂上恵子・重村淳・鈴木貴子（2009）海外在留邦人 100 万人時代のメンタルヘルス対策──第 1 報：米国北東部地域における邦人メンタルヘルス専門家の連携──，こころと文化，8(1)，69-76.

鈴木満・井村倫子・山中浩嗣・久津沢りか・松下静江・嶋崎惠子（2011）海外在留邦人 100 万人時代のメンタルヘルス対策──第 2 報：東南アジ

ア・南アジア地域における邦人メンタルヘルス専門家の連携──，こころと文化，10(2)，167-174.

寺嶋恵美（2014）Nobody's Perfect プログラム「完璧な親なんていない！」──地域における親支援プログラムの実践について──，ソーシャルワーク研究，40(3)，41-47.

漆澤恭子・阿子島茂美・伊澤正雄・安岡由紀子（2011）海外での教育的ニーズのある児童への支援──現地での支援と国内転入への支援を考える──，植草学園短期大学紀要，12，55-63.